



学校図書館を 活性化しよう

来年度から完全実施される新しい学習指導要領では、「読書と情報活用」が系統的に位置づけられています。生徒たちにとっていちばん身近な「読書」の場、そして「情報センター」は、なんといっても学校図書館でしょう。学校図書館が活性化すれば、読書の習慣がつくとともに、読む・調べる・考える・書く能力も高まります。しかし、生徒が積極的に利用できるようにするには、ソフト面やハード面でさまざまな工夫が必要です。

本特集では、全国の小・中・高等学校を回って、魅力的な学校図書館づくりをされている児童文学評論家の赤木かん子さんに、「子どもが集まる学校図書館」とはどんなところかをうかがいました。そして、実際に赤木さんのアイデアで生まれ変わった図書館の事例をご紹介します。

さらに、司書教諭として教科指導と図書館の連携を研究されている塩谷京子先生には、ソフト面で、授業に生かす図書館というテーマで現場の取り組みをご紹介します。

インタビュー

子どもの集まる学校図書館って どんなところだろう？

—最近、図書館を利用する生徒が減ってきているという話をよく聞きます。どうすれば利用が増えるのでしょうか？

子どもたちが来る図書館にしたい！のなら、いちばん先にやらなくてはならないのは「分類」を考えることです。「ええっ？図書館の分類って、決まっているのがあるでしょう？」

—というあなたは図書館のことを知ってるかたですね。

そう、日本の公共図書館と学校図書館は日本十進分類法（通称NDC）という分類方法を採用しています。

でも、これはいわば倉庫用の分類で、「開架式」といって図書館員だけが書庫に入って本を探してる時代にはそれでよかったのですが、「開架式」といってお客さんに分で本を眺めて探してもらう（これが今の多くの図書館のやりかたですね）には困

るところがいくつもあります。

なので、日本の公共図書館は開架式に変えたとき、いろいろな工夫を考えました。たとえば、今月は六月だから「水の本」を集めて展示しよう、というように——。

このやりかたを別置（べっち）といいます。「基本の分類だけでは困るときには、ひとつのテーマで、あちこちから本を集めてきていいよ」というやりかたです。

—中学校の図書館だったら、どんな「別置」が考えられますか？

たとえば、今年の公共図書館にはどこでも「海援隊フェア」とか「龍馬フェア」というテーブルができています。

そういうテーマで、今、中学生のために棚を作ろうと思うのなら、

- ① 現代の文学（ヤングアダルト）
- ② 危機管理

③ 心の問題

という三本の別置の棚をつくることです。

これが、群馬県富岡市立西中学校の司書・武部裕子先生が作った別置の「人気の棚」の中身です（P7）。

まずはじめに、ただ人気の本を集めただけではなくて、中学生に合う分類別置を考えて、本を集めたわけです。

①「ヤングアダルト」は、いま現在の生活を描いたブンガク、物語……。

いまだったら、その小説にケータイが出てくるか、こないかがこの分類の分かれ目ですね。

主人公が、公衆電話をかけにいくと、子

児童文学評論家 赤木かん子

赤木かん子

児童文学評論家。長野県松本市生まれ、千葉育ち。法政大学英文学科卒業。1984年に、子どものころに読んでタイトルや作者名を忘れてしまった本を探し出す「本の探偵」として本の世界にデビュー。以来、子どもの本や文化の紹介、ミステリーの紹介・書評などで活躍。また、全国の学校図書館から依頼を受け、改装の指導も行っている。4月下旬、『学校図書館のつくり方』（光村図書）を発行。

▼公式ウェブサイト
<http://www.akagikanko.jp/modules/tinyd0/>



どもは反射的に「変だな、なんでケータイ使わないんだろ」って思ってしまったから。

②『危機管理』は心的、肉体的、性的虐待。いじめやネグレクト。テーマがこれなら、実際にあった話も、誰かが作った物語もどっちもここに入れます。

③『心の問題』……これは実際にあった話だけを入れます。そう、いじめ以外の中学生の気に入りそうな癒し系の本や闘病記や伝記（特にティーンのもの——子どもは子どもに興味があるから）などの『現実にあるもの』しか入れない『リアル系』の棚ですね。

たとえば『五体不満足』（乙武洋匡著）は分類でいえば普通は『伝記』に入ります。でもそうすると、隣は「マザー・テレサ」や「徳川家康」になってしまふ……。そうすると見つけにくくなるんです。

本にはたった一つの『正しい分類記号』があるわけではありません。一冊の本にはいろいろな方向性があるでしょう？

『五体不満足』は『ハンディキャップ』に分類することもできれば『伝記』にも『生き方』にも分類できる。

どの方向が『うちの図書館では』優位かを見て、その本をどの分類に入れるかはその図書館を預かっている司書が決めるの

です。あとはその近くに『ティーンズ文庫（電撃文庫）など』の棚を作り、中学生用の文学コーナーは完成です。

—図書館の棚や飾りなどの改装ではどんな工夫がありますか？

愛媛県松山市立北中学校の関谷千代子先生の事例（P8）ように、自然科学の棚を整理して少数の本でカッコよく作り、居場所としての机やいすの配置に注意し、手書きの張り紙は撤去。できるなら中学生がカッコいいと思うポスターをはり、できるなら宮城県仙台市立加茂中学校の事例（P9）のようなカエル司書も採用し、毎月の飾りもできるだけする、中学生が読みたい本を入れる……などで、中学校の図書館はよみがえるはずです。

飾りつけを大人の女性好みにならないようにするのがコツ！

テーブルクロスも掛け、カーテン、床、いすの背もたれ、書架の色をトータルコーディネートするように考えます。

—図書館にたくさん生徒たちが集まれば、学校も変わりますよね？



生徒の心を和ませる季節の飾り付け（仙台市立加茂中学校）
©1994 NAKAJIMA CORPORATION

そうですね。先生がたも生徒さんたちも、本を手にしたときの持ちかたが変わってきますね。手慣れた、自然な持ちかたになっていきます。

毎日のように図書館にやってきて本を探して借りて読む、ということをしくり返してやっていくうちに、本の使いかたや図書館の使いかたに慣れて、無意識に動けるようになる。

特に、子どもたちの頭の中が、世界とつながっていくのが手に取るようになります。

不安そうな自信なげな顔つきだったのが、落ち着いて、図書館全体が良い活気に満ちて安定してくるのです。その安定はやがて図書館から流れ出て、学校全体に広がっていきます。

図書館を活性化することで、学校全体が知的に落ちていくんですよ。

本には人を落ち着かせ、高い所に引き上げてくれる力があるんです。

実践編

こんな工夫で、図書館が生まれ変わりました

生徒が読みたい本、 関心のある本を一等地に

群馬県富岡市立西中学校



中学生用の分類を考える

群馬県富岡市立西中学校の学校図書館の特徴は、「生徒が読みたい本は、いちばんいい位置に」である。

従来は、図書分類の基本である日本十進分類法（NDC）に従って、館内を時計回

りに「0総記」「1哲学」「9文学」という順に並べていた。しかし、そうすると入り口から入っていちばん目立つところに、歴史や社会科学といった、難しい印象を与え、生徒たちがあまり手に取らない本が並んでしまう。それがそのまま図書館のイメージとなってしまうていたのだ。

司書の武部裕子先生は、赤木かん子さんのアドバイスを受け、本の配置を一から見直し、本当に生徒にとって必要な本、読みたい本、生徒が関心のある本を入り口の正面に配置した。

この書架は、上四段には小さい本しか入らず、下の二段は大きいため、上と下には違う種類のものを入れてなくてはならない。それで、この一等地の書架の上四段に

はミステリー、ファンタジー、ヤングアダルトなどの文学系と心、性、危機管理などの本を並べ、下の二段には、占い、料理などエンターテインメントを配置した。生徒たちがよく読むヤングアダルトの横に心や性に関する本を置いておくと、自然に手に取るようになる。こうした生徒の動線に着目した配置も大切である。

生徒たちは「おもしろい本はない？」「楽しい本はない？」と武部先生に聞いてくる。従来の分類だと、書架のあちこちに散らばっていた本を、一か所に集めておけば「あの棚を見てみれば」などとアドバイスもしやすくなる。

古い本は廃棄する

こうした大規模な再配置をするにあたって、まず取り組んだのは本の選別である。本の奥付を見ながら、特に地理など情報が古くなっているものを中心に廃棄してい



ヤングアダルト、危機管理、心の問題など、中学生が読みたい本を別置

く。ただし、すぐに捨てるのではなく、一時的に空き教室を利用した書庫に保管。一年間はそうしておいて、利用がないことを確認した上で廃棄するのだ。本を捨てるという抵抗がある人が多いが、このような手法をとればスムーズに本の選別が進む。

西中学校では、蔵書のおよそ一割強に当たる千冊を廃棄。空いた書架を別室に移す

一日の改装で、わくわくする図書館に变身

愛媛県松山市立北中学校

2

ことによって、図書館の見通しがよくなるというメリットもあった。

図書委員やボランティアの生徒の手伝いで、同時に大規模な掃除や部屋の飾りつけなどの改装も実施。こうしたアイデアと努力が実って図書館に生徒が集まるようになり、貸し出し数は三年間でなんと三倍に伸びた。



この引き出しの底には、プラスチックダンボールをカットして布を貼ったものを敷いた。横幅が広いので、色をつけないともたないで、左の引き出しのクモの下には空の布を、右のサメの下には海の布を貼ったものを入れた。こういうちょっとしたポイントが全体を引き締める。



北中学校では昨年十月、自然科学系の書架に絞った図書館の改装を行った。かなり古い本も多く、生徒たちが近づくかず、活用されていないコーナーとなっていたからだ。理科の先生の協力で、現在では使えなくなっている内容の古い本を選んでもらい廃棄。その上で、今の生徒たちをひきつける楽しい本を補充した。「飛び出す絵本など、子どもっぽいという先入観をも

たれている方もいらっしやるかもしれないですが、今の仕掛け絵本は非常に高度で情報も新しく、内容的にも大変充実しています」と、司書の関谷千代子先生。ビジュアル系の本の重要性を痛感している。

この図書館は、以前は家庭科室として使われていたため、書架の代わりに引き出し付きで書架としては使い勝手の悪い食器棚が使われていた。今回の改装では、この引き出しに、赤木さんのアイデアで、鉱石標本、恐竜のフィギュア、化石、万華鏡などの理科の小物を入れた。その結果、無用の長物だった引き出しは、わくわくしながら開けて楽しめる宝箱に变身。たちまち生徒の人気を集め、これまでほとんど利用者がなかった自然科学系の本も手にとって見てくれるようになった。

生徒にとってお目当ての自然科学系の書架は、図書館の一番奥にあるので、そこへ行くまでにはほかの分野の本にも興味をもちはじめ、図書館に活気がよみがえった。材料集めは別として、たった一日の改装でここまで楽しいコーナーができた上だった北中学校では、また新年度も他の分野でもチャレンジしてみ、さらに「わくわくする図書館」を作り上げていく予定だ。

全教職員が手伝い、図書館への意識高まる

宮城県仙台市立加茂中学校

3

加茂中学校の悩みは、文学を中心にした書架が縦に何列も並んで暗い部屋になっており、生徒たちがなかなか寄りつかないことだった。

この図書館を見た赤木さんは、改装にあたって五つのポイントを示した。

①現在のカウンターは図書館全体が見渡せないで移動。

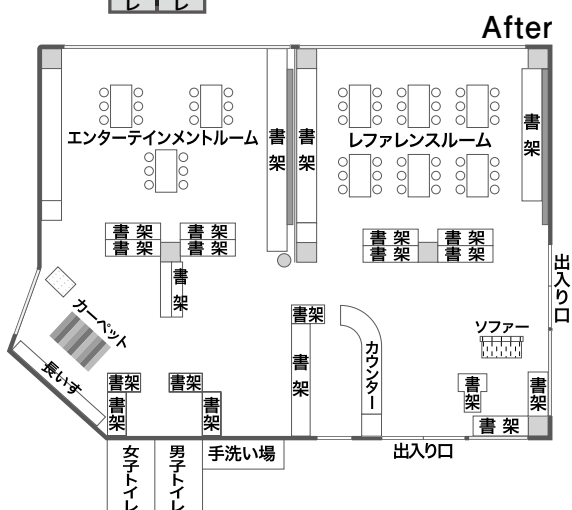
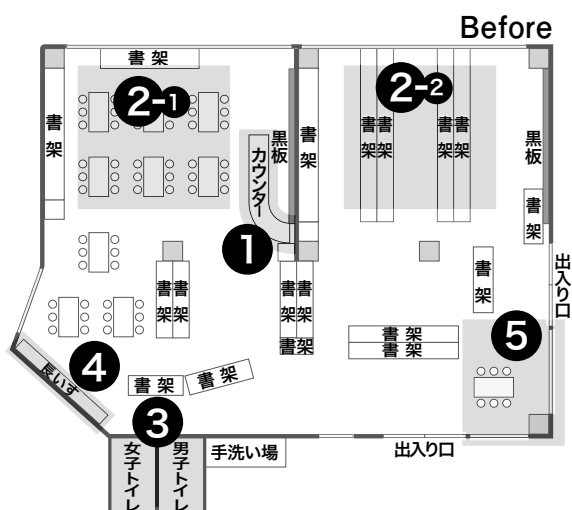
②二部屋に分かれた構造を生かして「レファレンス（勉強系）」と「エンターテインメント」に分ける。

③丸見えのトイレを目隠し。

④くつろげるコーナーを作る。

⑤居心地がよさそうなのにデッドスペースになっているところを生かす。

全教職員三十五人とボランティアの生徒



入り口のカウンターではカエル司書が出迎えます
©1994 NAKAJIMA CORPORATION

二十人、保護者十人、そのほか県内の学校司書や地元書店の人などの手伝いで、まる三日で作業は終了。改装にかかった費用は新規に購入した書籍代三十六万円と小物や消耗品費が二十万円。

全教職員が手伝ったことで意識も高まり、授業で図書館を活用することが増えた。生徒たちも、くつろげる場所として毎日大勢が集まるようになった。

※加茂中の改装の手順や方法などは、赤木さん著『学校図書館のつくり方』（光村図書）で詳しく解説しています。

生徒と図書館をつなぐために

関西大学初等部教諭 塩谷京子 しおやきょうこ



れるようになった。

その結果、図書館に資料があることと生徒が資料の使い方を知っていることで、各教科の学習がスムーズに進み、単元の目標が達成されるという成果が出てきている。もちろん、先生がたの反応も「やってよかった」と好評である。「指導案と資料をさらに整えていくことが今後の仕事です」と語ってくれた。

小学校で習得した力を生かして

堀内典子先生（静岡県磐田市立城山中学校）は、現在、磐田・袋井地区の司書教諭の有志が集まるブックプロの会を支えている。司書教諭は各学校において一人職であるため、互いの情報交換や実践共有の場を作ろうとしている訳だ。

堀内先生は、最近の生徒は本の分類など基本的なことは知っており、調べることやまとめることをいやらがらずに、おもしろ

不足していたり指導に時間がなかったりすることを理由に、先生がたが立ち止まっているのを感じていた。

萩田先生は、まず、校内の先生方に図書館を使って授業をしたい単元をあげてもらい、それをもとに年間利用計画を作成した。合わせて、単元で使いそうな本をリストアップして提供し、先生方が選んだ本を購入した。こうした手順の末、ようやく図書館に授業で使いたい資料が整うことになる。しかしながら、資料が整ったからといって、すぐに授業で使える訳ではない。生徒はどこを見てどう調べればいいかわかっていないからだ。生徒が授業で資料を使えるようにするためには、情報活用スキルの習得が必要である。

司書教諭である萩田先生には、情報活用スキルを指導する時間数がないことから、学級担任が学活、道徳、総合的な学習の時間に行うことを基本に計画を立てた。さらに、指導案と資料を添えたことで、学級担任の負担は軽減され、多くの学級で指導さ

図書館を機能させたい

こんな声が中学校の先生から聞こえてくることがある。

「小さいころは時間もあつて読書が好きなのですが、中学生になると忙しくて本を読む時間がありませんね。」

「教科指導で、図書館を使うことはほとんどありません。使いたい気持ちはあつても現実的には難しいですよ。」

読書は必要、図書館を機能させたいという思いはあるが、糸口を見出せない現実がある。この状況から何とか脱却できないものかと、司書教諭の模索が始まっている。

図書館を授業で使うためのしくみ

図書館を各教科で使うためのしくみ作りを模索しているのは静岡県袋井市立袋井中学校の萩田純子先生である。授業で図書館を使う必要性は感じているものの、資料が

がって取り組む傾向を肌で感じている。利用指導の際、少しの工夫を積み重ねることで、図書館利用が活性化するのではないかと考えている。

前任校の磐田市立豊岡中学校では、このような生徒のよさを生かしながら、中学生として必要な図書館活用の技能を習得させる利用指導を進めてきた。たとえば、以前は課題をグループに与えると一から細かい指導が必要だったが、最近では各グループで役割分担をしながら、課題を解決する過程を経験させている。与えられた課題に対して、資料がどの書架にあるのか考える子、書架へ本を探しに行く子、目次や索引を使って探す子、要約したり引用したりする子、分析する子といった具合だ。

一斉授業が多く行われる中学校でグループ学習を試みるなど、ちょっとした工夫の一端が見える。

中学校での調べ学習は図鑑から

静岡県沼津市立第五中学校の渡邊紀子先生は、「字を追っていく読書は読み物で、教科で使う本はビジュアルで」という観点で本を揃えている。

小さな積み重ねが

生徒と図書館の距離を縮める

三人の司書教諭は、誰もがができる実践を積み重ねている。図書館を通して、知的にも精神的にも読むことの素晴らしさを感じるようになっていく生徒の姿が、その原動力であろう。一人の先生の図書館への導き方は一本の糸であったとしても、何人もの先生が生徒を導けば糸が集まって丈夫なひもになる。

もし、各教科の教師一人ひとりが一年間にたったの一回、生徒を図書館に連れていったとしたら、およそ月に一回のペースで生徒は授業で図書館を使う計算になる。それだけで、生徒と図書館の距離はぐっと縮まる。司書教諭の事例を参考に、一年間に一回は図書館でどんな授業ができるのかを考えてみたらどうだろうか。こういう小さな積み重ねがあつてこそ、生徒と図書館がつながっていくのである。

塩谷京子

静岡県公立小学校教諭を経て、現在、関西大学初等部教諭。静岡県静岡市生まれ。司書教諭。著書に『しらべる力をそだてる授業!』（ポプラ社）、『学校図書館で育む情報リテラシー』（全国学校図書館協議会）など。

▼塩谷先生のホームページ
<http://homepage1.nifty.com/kyotti/>